

(課程博士・様式9)

愛知教育大学・静岡大学大学院教育学研究科

# 学位論文審査報告書

審査委員

審査委員長 石川 恭  
委員 伊藤 貴 啓  
委員 稲葉 みどり  
委員 飯島 康之  
委員 白畑 知彦  
委員 \_\_\_\_\_  
委員 \_\_\_\_\_

審査期間 令和3年 11月 22日 から 令和 4年 1月 17日

審査論文

英語劇活動における協働対話がランゲージングに与える影響についての研究

専攻 共同教科開発学専攻

氏名 市川 裕理

生年月日 昭和50年 2月 7日

提出日 令和3年 11月 12日

この論文は、高等専門学校での英語教育の実践に基づいた実証研究である。特に、英語劇活動における協働対話に注目し、学習者がより伝わる英語表現についての知識・理解をどのように得ているのかについて、ランゲージング理論を用いて実証的に明らかにしている。論文は、次の7章で構成されている。

第1章では研究の目的と背景について述べている。第2章ではランゲージングに関する先行研究を精査し、この研究での問いを明確にしている。第3章では英語劇活動についてどのように授業実践を行ったかを記述している。第4章では学習者の英語劇活動に対する認識をアンケート調査し、KH-Coderを用いて分析し、学習者が対話によって「伝えるための英語表現」について理解を深めていることを明らかにしている。第5章では協働対話の中身を明らかにするために談話分析を行っている。40グループの対話から408個の台本関連エピソード(SREs)を取り出し、各エピソードについて対話の内容、対話の成果、各発言の機能面から分析を行い、学習者は、母語の知識も活用し協働で適切な英語表現を考える場合に英語表現の更新(知識構築)が見られるとしている。文脈上の適切さについて話し合うことは、学習者同士のモニタリング機能を促進し(協働的足場かけ)、より適切な英語表現の更新(知識構築)へとつながるという知見を得ている。第6章では、エピソードにおける文脈を考慮することが知識構築に対して、有意な影響を及ぼしていることを突き止めている。以上から、英語劇活動における協働対話では、どのように言葉を伝えればいいのかについて、文脈を考慮した検討がお互いのモニタリングを働かせ、共通理解に基づいたより伝わる英語表現への更新へとつながっているという結論を導いている。第7章では、この研究から得られた教育的示唆に触れ、研究の限界と今後の方向性や課題を提示している。

この論文は、学習者間の協働的対話がどのように伝わる英語表現を見出すことに繋がるかという学習の過程に着目し、詳細なデータに基づく分析や考察を行っている。言語研究の理論的基盤は、今後固めていく必要が十分あるが、英語劇活動という独自の英語の学習方法を開発、実践している点、言語学習のプロセスに着目し、学習者間のやりとりがどのように英語の学習に繋がるかを追究している点、文脈

(コンテキスト)とコミュニケーションを考慮した英語表現の運用に着目している点には新奇性が認められる。ランゲージングの理論に基づいた実践研究、実証研究は、まだ殆ど見られず、当該分野の萌芽的研究と言える。今後、学習者の学びをいかにしてより主体的 (active) にしていくか、「英語劇活動」という方法論の可能性や限界、言語表現の適切性の備えるべき文法的正確さとその習得等、取り組むべき課題は多く残されている。しかし、今後この論文が公開され、理論面、実証面等、様々な角度から批判・評価等を受けることで、これらの様々な課題を解決し、教科開発学に示唆を与えるものとなるであろう。研究者の出発点として博士号を位置づけるなら、それに値するものと言える。よって、本教科開発学専攻の学位論文として認める。